

諸召会に語るその霊、ダビデのかぎを持つ方、勝利者と共に食事をする方

聖書：啓 3:7-22

I. 啓示録第2章と第3章でキリストは、すべての召会に語るその霊です：

- A. 啓示録第2章と第3章で、無限の、命を解き放つ、七倍に強化された、霊なるキリストの七つの召会に対するそれぞれの手紙の冒頭の語りかけは(2:1, 8, 12, 18. 3:1, 7, 14)、七倍に強化された、すべてを含む、命を与える霊の七つの召会すべてに対するそれぞれの手紙の終わりでの普遍的な語りかけとなります(2:7, 11, 17, 29. 3:6, 13, 22)。
- B. ですから、語るキリストは語るその霊、すなわちすべての召会に語るその霊となります。キリストは特定の地方召会に語り、その霊は宇宙的なからだに語ります。
- C. これは、その霊が主であり、主がその霊であることを示しているだけでなく、召会の墮落の暗やみの中では、その霊が極めて重要であることも強調しています。これは、第1章4節で七倍に強化された霊によって示されているとおりです。
- D. 啓示録第2章と第3章の七つの手紙は主イエスが語った言葉ですが、今日わたしたちがそれらを読むとき、神の七つの霊がそれらの言葉をわたしたちに霊の中で、神のエコノミーの目的のために語ります。それぞれの手紙の冒頭にある主の言葉は、特定の地方召会に対してですが、後にすべての時代の人々がそれを読んでも、それはすべての召会に対するその霊の語りかけとなります。
- E. その霊の語りかけは、常にわたしたちをキリストの注入に立ち返らせます。その霊の語りかけはキリストの注入です——参照、Ⅱコリント 3:16-18：
 - 1. わたしたちは神の七つの霊が諸召会に語るのを聞くときはいつでも、直ちに、尊く、甘く、愛すべき指導の下にいます。すなわち、わたしたちを変化させ、造り変え、適切な材料とならせ、神の建造の中へと建造する注入の下にいます。
 - 2. 火の池に行かなければならないものは何であれ、七つのともし火によって焼き尽くされます(啓 4:5)。今やわたしたちは七つの目の下にいて(5:6)、キリストであるすべてを注入されつつあります。それは、わたしたちが新エルサレム的一部分となるためです。
- F. 諸召会の中にいる信者たちはその霊の語りかけを聞く地位にあり、こうして聞く耳を容易に持つことができるのですが、彼らがみな緊密に彼の語りかけに従うわけではありません。このゆえに、勝利者たちに対する召しがあるのです。
- G. その霊が諸召会に言うことを聞く耳のある者たちは、聞くべきであり、聞く者たちは勝利者となります：
 - 1. 主は常にわたしたちの耳を開いて、彼の声を聞かせようとします。それは、わたしたちが彼のエコノミーにしたがって物事を見るようになるためです——ヨブ 33:14-16. イザヤ 50:4-5. 出 21:6。
 - 2. 鈍い耳は割礼される必要があります——エレミヤ 6:10. 使徒 7:51。
 - 3. 罪人の耳は贖いの血で清められ、その霊で油塗られる必要があります——レビ 14:14, 17, 28。
 - 4. 祭司として主に仕えるために、わたしたちの耳は贖いの血で清められる必要があります——出 29:20. レビ 8:23-24。
 - 5. その霊は諸召会に語っているので、わたしたちはみな耳が開かれ、割礼され、清められ、油塗られて、その霊の語りかけを聞く必要があります。

H. その霊の語りかけは、召会歴史における七種類の召会についてです。すなわち、初期の召会(エペソ)、苦難の召会(スミルナ)、この世的な召会(ペルガモ)、背教の召会(テアテラ)、改革の召会(サルデス)、回復の召会(ヒラデルヒヤ)、回復されて墮落した召会(ラオデキヤ)です：

1. 最後の四種類の召会は、すべて主の再来まで存続します。
2. 疑いもなく、回復の召会だけが、神の永遠の定められた御旨を成就することができません。回復の召会だけが、主の求めているものです。わたしたちは、主の選択するものを選びなければなりません。
3. ラオデキヤは変質したヒラデルヒヤであり、なまぬるく、霊的に高ぶっています——啓 3:14-17：
 - a. ラオデキヤの意味することは、何でも知っているが、実際には何に対しても熱心でないということです。名目上では何でも持っていますが、命がけでやっていることは一つありません。以前の栄光は覚えていますが、現在の神の御前での状態は忘れていきます。
 - b. もしわたしたちがヒラデルヒヤの道を走り続けるなら、神の御前でへりくだることを覚えていなければなりません——参照、7-22 節、イザヤ 57:15、66:1-2。

II. 回復の召会(ヒラデルヒヤ)で見られるキリストは、その肩に神の家(神の王国を建造するためのダビデの家によって予表されている)(宝物倉の)かぎが置かれている方です——22:22、啓 3:7：

- A. 回復の召会にとって、キリストは、ダビデのかぎ、王国のかぎを持ち、開いたり閉じたりする権威を持っている方です。主は、一つ思いにある回復の召会に、だれも閉じることのできない開いている門を与えました——8 節、参照、詩第 133 篇。
- B. ダビデのかぎは門を開いて、わたしたちが白い石へと造り変えられ、神の家の中へと建造されて、神の御名、新しいエルサレムの名、主の新しい御名がある柱となさせます——啓 2:17、3:12：
 1. わたしたちが神の中へと建造され、新エルサレムの構成要素となり、新しいキリストの一部分となることは、人には不可能ですが、わたしたちの内側の命の霊の法則は、不可能に対応する要素を含んでいます——ローマ 8:2、啓 3:7-13、参照、創 28:12-19、ヨハネ 1:51。
 2. キリストは神の宝物倉の戸を管理するかぎを持っていて、その宝物倉にはわたしたちの享受のための、キリストにある神の豊富があります。わたしたちは、彼がこれらの豊富をわたしたちに開くことと閉じることを経験しています——エペソ 4:30、I テサロニケ 5:17、I ヨハネ 1:7、9：
 - a. わたしたちは宝物倉としての神の豊富を享受するために、命の感覚にしたがって主との接触の中にとどまり、主と接触し続け、霊の中で貧しくなり、心が純粹になる必要があります——II コリント 2:10、ローマ 8:6、10:12-13、コロサイ 3:16、マタイ 5:3、8。
 - b. わたしたちは宝物倉としての神の豊富を享受するために、自己を否む、十字架を負う、魂の命を失うというかぎを用いることを学ぶ必要があります。わたしたちはみな「セブナ」であり、わたしたちはキリストによって取り除かれ、置き換えられるべきです。それは、キリストがわたしたちの中で、わたしたちに対してすべてとなり、またわたしたちを通して、わたしたちのためにすべてを行なうためです——イザヤ 22:15-19、マタイ 16:24-25。

III. 回復されて墮落した召会で見られるキリストは、勝利者と共に食事をし、彼が勝利を得て、彼の父と共に彼の座に着いたのと同じように、勝利者を彼と共に彼の座に着かせる方です——啓 3:20-21：

A. 「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸を開くなら、わたしは彼の所に入って行き、彼と共に食事をし、彼はわたしと共に食事をするであろう」——20 節：

1. この戸は個人の心の戸ではなく、召会の戸です。召会のかしらである主は、墮落した召会の外に立ち、その戸をたたいています。
2. その戸は召会の戸ですが、その戸は個人の信者によって開けられます。ラオデキヤに在る召会には知識はありますが、主の臨在がありません。
3. 主の目に回復されて墮落した召会は、(1)悩んでいる。なぜなら、召会は教理のむなしい知識において豊かであると誇っていますが、実はキリストの豊かさの経験に全く貧しいからです。(2)みじめである。なぜなら、召会は裸で、盲目で、恥と暗やみに満ちているからです。(3)貧しい。なぜなら、召会はキリストの経験に貧しく、神のエコノミーの霊的实际に貧しいからです。(4)盲目である。なぜなら、召会は真の霊的事柄における真の霊的洞察力に不足しているからです。(5)裸である。なぜなら、召会はキリストによって生きず、主観的な義としての、日ごとの歩みにおける第二の衣としてのキリストを生きないからです——15-17 節。参照、詩 45:1, 9-14。
4. 主は召会全体を取り扱っています。しかし、主の取り扱いを受け入れるのは、個人的で主観的な事柄でなければなりません。
5. 主と共に食事をするとは、単に一種類の食物を食べることではなく、豊富なごちそう、すなわち宴席にあずかることです。これは、イスラエルの子たちが、カナンの良い地の豊かな産物を食べたことの予表を暗示しています——ヨシュア 5:10-12。
6. わたしたちはキリストを命の木、隠されたマナ、宴席として享受することを通して、わたしたちの構成において彼とミングリングされて一つの実体となり、彼を表現して新エルサレムとなります——啓 2:7, 17. 3:20。

B. 「勝利を得る者を、わたしと共にわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父と共に彼の御座に着いたのと同じである」——啓 3:21：

1. 主と共に彼の御座に着くことは、勝利者に対する賞となります。それは、彼が来たるべき千年王国で主の権威にあずかり、彼の共同の王となって全地を支配することです——ルカ 19:11-27. マタイ 25:21, 23。
2. 神の意図は、人が御座に着くことができるために、ご自身を人の中へと造り込み、また人の上で働くことです。彼の願いは、わたしたちを御座のある民にすることです——啓 2:26-27. 3:21. 22:5. 参照、イザヤ 14:12-14。
3. 主イエスは十字架、復活、昇天を通して、御座にもたらされました。イエスという名の真の人が御座に着いています（エゼキエル 1:26）。今や今日、天と地の主、宇宙の主は人です。こういうわけで、わたしたちは「イエスは主である」と宣言し、またこういうわけで「おお、主イエスよ」と呼ぶのです。
4. 主イエスは御座への道を開きました。彼は開拓者、先駆者であって（ヘブル 6:20. 2:6-9）、御座への道を切り開きました（10-12 節）。彼は道を切り開いて先導し、わたしたちが後に続くようにしました。
5. 今や、わたしたちは御座へと行進しています。なぜなら、神はわたしたちを栄光へともたらそうと、また御座に着かせようとしているからです。神は人を通してご自身を現す

ことを願い、人を通して、王として支配し、治めることを願っています。神の意図は、サタンを追い出して、サタンによってとりこされていた多くの人を贖い、彼らを神の御座にもたらすことです。

6. わたしたちは召されて神の子たちとなり、王となるように運命づけられていますが、神にわたしたちの中で、またわたしたちの上で働いて、わたしたちを王職のために資格づけていただく必要があります——ローマ 5:17, 21. 参照、エゼキエル 1:22, 26. マタイ 8:9。